少年駅夫

鈴木三重吉

一

スウェーデンの冬は、それはきびしい寒さで、わたしのような外国人が、首府のストックホルムより北へ旅行するなどということは、めったにありません。ストックホルムの八百マイル北方までには、ボスニア湾にそった、谷間の平地に、村らしい村がないのでもありませんが、それからさきはノルランドという、いったいの広野で、もうくだものの木なぞは一本もなく、作物といえば、ただわずかばかりのおおむぎとジャガイモが作れるばかりです。そのすこしおくへいくと、かつて人間が足をふみいれたことのない大深林や、いちめんにこおりついた湖水や、雪と氷とにおおわれた、高い山脈だけがつづいているのです。生命をもって動いているものといえば、くまとおおかみと、野生のとなかいのむれのほかにはなにものもおりません。こんな広野の中に住む人間が、みなさんにくらべて、どんなに、よりしんぼうづよく、より働きずきにできあがっていなければならないかを、ためしに想像してごらんなさい。

わたしは、ある用事で、こういうノルランドの真冬を旅行してきました。この土地へはいると、寒暖計はたちまち零度にくだり、どんどん、零下十度、二十度、しまいには、三十度いじょうにもなってきます。でも、からだは、あついあつい毛皮で、頭のさきから足のさきまでくるみ、顔も、ほとんど目ばかり出しているだけですから、それほどの寒さもかくべつ苦痛でもありませんでした。

乗りものは、むろんそりだけです。冬中は沼も河もかたくこおりついており、その上を、となかいや馬が、そりをひいてどんどん走りわたるので、雪のないときに馬の背中をかりて、遠まわりをして歩くよりも、よほどべんりです。とちゅうには、すべての旅行者のために政府の手で十マイル、または二十マイルおきの村むらに駅舎がたてられています。その駅舎駅舎にい